

日本語学習者の「か」の使用に関する研究

— 終助詞を中心にして —

漆 田 彩

1. はじめに

終助詞の「か」は、主に疑問文を作る際に用いられる。「明日のパーティーに参加します」という文を、問いかけの形にした場合、文末に終助詞「か」が付加され、「明日のパーティーに参加しますか」となる。また、「か」には「何をするのかわからない」のように埋め込み疑問文の中で用いられる用法もある。日本語学習者が日本語を学び身に付けていく上で、この形式の習得は不可欠である。では学習者たちはどのような段階を経て、終助詞「か」を用いた形式を、問題なく使用できるようになっていくのであろうか。

Oral Proficiency Interview という、学習者のレベル判定のための会話能力試験がある。頭文字を取って、OPI と呼ばれている。この試験での学習者 90 人分の会話が録音されている、OPI テープを文字化した言語資料が存在する。その言語資料は、作成者である南山大学の鎌田修教授と実践女子大学の山内博之教授の名字の頭文字をそれぞれ取り、KY コーパスという名称が付けられている。

本稿では、この KY コーパスを用い、学習者の「か」の使用に関する分析を行った。ただし、本稿においては、終助詞「か」のみでなく、並立助詞「か」や「とか」「なんか」なども分析の射程に含めた。つまり、文法的形態素の「か」と文法的形態素の一部となっている「か」の全てを分析の対象にしたということである。

その結果、学習者の「か」の使用に関してある特徴が明らかになった。日本語レベルが高い学習者と低い学習者の発話の間に、明らかな差異が見られたのである。具体的に述べると、以下の二点が挙げられる。

- (1) 初級・中級学習者にとって、「普通形+か」の使用は難しい。
- (2) あるレベル以上の学習者にしか見られない「か」の使用パターンがいくつか存在する。

(2) は、つまりその言語形式を使用した学習者のレベルが自動的に分かるということである。山内 (2009) では、そういった形態素のことを、示準化石の代表であるアンモナイトになぞらえて、「アンモナイト形態素」と呼んでいる。アンモナイトとは、デボン紀になって突然、大量に出現した化石である。ある一定のレベルに達するとその言語形式が大量に発言されるようになれば、それはまさにアンモナイト化石のようであるということから、「アンモナイト形態素」と名付けられたのである。

本稿では、アンモナイト形態素の考えにつなげることのできる「か」の使用パターンを特定するまでの分析の過程を、表にまとめながら詳細に述べていく。

2. 先行研究

ここでは「か」に関する先行研究を見ていく。まずは、日本語学における「か」の用法の記述を確認する。庵ほか (2001) では、「か」の用法として、主に以下の三つが挙げられている。

一つ目は、質問を表す表現である。これは、形式としては、「丁寧形+か」「普通形+か」が当てはまる。例として、「田中さんは学生ですか」「田中さんは渋谷でパソコンを買ったんですか」などが挙げられている。二つ目は、確認・聞き手の知識の活性化を表す表現である。これは、形式としては、「普通形+ではない(です)か」が当てはまる。例として、「乗り遅れてしまったではありませんか」などが挙げられている。三つ目は、疑い・不確かさを表す表現である。これは、形式としては、「名詞など+(です)か」「普通形+かな」「だろうか」「動詞や形容詞の普通形+のではないか」が当てはまる。例として、「この絵、偽物か」「明日も雨が降る(の)かな」「明日は晴れるだろうか」「明日は雨が降るんじゃないか」などが挙げられている。

次は、日本語学習者の「か」の使用に関する先行研究を見る。西川 (2009) では学習者の学習環境の違いによる日本語の差異が述べられている。海外である程度日本語を身につけてから日本に来た学習者は、相手に何か問いかける際、終助詞「か」を多く使用する傾向が見られる。一方、日本語の知識を持たずして日本に来て学んだ学習者の発話には、同じ問いかけでも終助詞「か」の代わ

りに「ね」「よね」の使用や、上昇イントネーションで済ませるといった用法が見られるとのことである。

しかし、西川（2009）では、学習者のレベルによる違いについては一切触れていない。西川（2009）での主張が全てのレベルの学習者に当てはまるとは考えにくい。レベル間での日本語使用の違いについての分析も必要であると思われる。

3. 調査方法

学習者のレベル間における差異を明らかにするために、1. でも触れた KY コーパスを用いて調査を行った。ここでは KY コーパスの詳細、及びそれを用いての調査方法を記す。

KY コーパスとは、90 人分の OPI テープ（1 人 30 分以内）を文字化した言語資料のことである。90 人の内訳は、初級 15 人・中級 30 人・上級 30 人・超級 15 人となっている。レベルごとに更に細かくサブレベルが設けられており、初級と中級にはそれぞれ上、中、下の三つのサブレベルがある。上級には「上級」と「上級-上」という二つのサブレベルがあり、超級にはサブレベルは存在しない。使用範囲を限定せず、全データを分析の対象とした。

初級 15 人・中級 30 人・上級 30 人・超級 15 人という内訳の計 90 人の学習者の KY コーパスにおける発話から、文法的形態素「か」、及び、文法的形態素の一部となっている「か」が使用されている文¹を全て抜き出す。抜き出した文をレベル別・種類別に分け、表に示す。その際、「茶釜」などの形態素解析ソフトは使わず、全て自分の目で確認して抜き出した。ソフトを使わなかった理由は二つあり、一つは、文法的形態素の一部となっている「か」はどのようなものが出現しているか、事前に全てを予測することはできないためである。もう一つは、学習者には誤用も多いので、その誤用も拾うためである。

4. 「か」が含まれた文の総数

KY コーパスの全範囲から、文法的形態素「か」、及び、文法的形態素の一部である「か」を抜き出した結果、それらの総出現数が 3761 であることが確認できた。大きく、終助詞「か」とその他の「か」に分類し直した。それぞれの出現回数の合計を、以下の表 1 にまとめる。（ ）内の数値は、使用率をパーセントで示したものである。

表1. 使用された「か」の総数

終助詞「か」	1944 (52%)
その他の「か」	1817 (48%)
合計	3761

表1から、終助詞「か」とその他の「か」の出現回数の合計は、ほぼ半数ずつであることが分かる。

なお、終助詞「か」の出現回数を数えた際、「～かも分からない」「～かもしれない」「～かしら」の「か」は含めていない。

以上、本章では、終助詞「か」とその他の「か」の総出現数について述べた。次章からは、それぞれを細かく分析していく。

5. 終助詞「か」の使用に関する分析

終助詞「か」とその他の「か」のうち、まずは中心的課題である終助詞「か」の分析から行っていく。

終助詞「か」を、更に丁寧形述語に接続する「か」と普通形述語に接続する「か」に分類し、それぞれの出現回数を以下の表2にまとめる。()内の数値は、使用率をパーセントで示したものである。

表2. 丁寧形・普通形のそれぞれの総数

	初級	中級	上級	超級	合計
丁寧形述語に 接続する「か」	66 (97%)	426 (77%)	326 (43%)	233 (41%)	1051 (54%)
普通形述語に 接続する「か」	2 (3%)	126 (23%)	434 (57%)	331 (59%)	893 (46%)
合計	68	552	760	564	1944

まず、各レベルの形態素数の割合に関して触れておく。但し、今回は擬似的に各レベルの文字数の割合を計算した。その結果、初級学習者は全体の約8%、中級学習者は全体の約31%、上級学習者は全体の約41%、超級学習者は全体の約20%を占めていた。つまり、およそ1:3:4:2という割合である。

表2から分かることを確認する。まず初級は、丁寧形が66回で97%、普通形がわずか2回で3%であり、圧倒的に丁寧形の出現が多い。中級は、丁寧形が426回で77%、普通形が126回で23%であり、若干普通形の割合が増えるが、

まだ丁寧形の出現が多い。ところが上級になると、丁寧形が326回、普通形が434回で、普通形の方が多くなる。超級も、丁寧形が233回で普通形が331回のため、普通形の出現の方が多い。

初級と中級とでは文字数に3倍の差があるので、初級と中級の間で「か」の出現数に3倍の差があってもまったく不思議ではない。しかし、初級と中級の「か」の出現数の差は3倍どころではない。初級と中級とでは丁寧形は6倍、普通形は60倍以上もの差があるので、それぞれのレベルに含まれている文字数の違いを考慮しても、「非常に大きな差がある」と判断して問題ないものと思われる。

さらに、初級学習者は、普通形の発話が2例のみである上、使用部分には誤りも見られた。このような初級・中級と上級・超級との逆転現象には、次のような理由が考えられる。

それは、学習者が日本語を学ぶ際には、まずは丁寧形から教えられる場合が多いということである。その理由として、丁寧形のほうが活用の仕方が簡単であるためということと、待遇上無難であるためということが挙げられる。前者について具体的に述べると、丁寧形は肯定・否定・過去・非過去のどれを表す場合も連用形で済むが、それに対して普通形は、肯定を表す場合は終止形、否定を表す場合は未然形、過去を表す場合は連用形、というように、活用形を変化させる必要がある。後者の「待遇上無難であるため」というのは、丁寧形は誰に対して使用しても失礼にあたらないということである。

上記の理由により、初級・中級学習者の発話には普通形より丁寧形が多く出現し、上級・超級学習者の発話には丁寧形ばかりでなく普通形も多く出現するのだと考えられる。

以上、終助詞「か」を丁寧形述語に接続する「か」と普通形述語に接続する「か」に分類し分析を行った。次からはそれら二つを、更にそれぞれ「コピュラ文+か」「動詞文+か」「形容詞文+か」「副詞+か」に分類し、細かく分析していく。

まず、丁寧形述語に接続する「か」から、レベルごとの出現数を見ていく。結果を、以下の表3に示す。

表 3. 丁寧形に接続する「か」

	初級	中級	上級	超級	合計
コピュラ文 例：明日ですか	38	161	205	145	549
動詞文 例：行きますか	16	184	77	53	330
形容詞文 例：美しいですか	6	41	14	6	67
副詞+ですか	6	40	30	29	105
合計	66	426	326	233	1051

表3から分かることを確認する。まず初級はコピュラ文に接続する「か」の出現が38回で、他の動詞文、形容詞文、副詞+ですかと比べて最も優勢となっている。中級になると逆転現象が起き、動詞文が184回で最も優勢である。ところが上級になるとコピュラ文の出現回数が205回で、再びコピュラ文が最も優勢になる。超級に関しても、コピュラ文が145回で最も優勢である。

終助詞「か」を伴う文を見た限りで言うと、初級学習者は動詞文の使用頻度が増すことで中級になり、さらにコピュラ文の使用頻度が増すことで上級・超級へと進んでいくと解釈することができる。

以下に、中級学習者が発話した動詞文の、「丁寧形+か」の実際の使用例を、KY コーパスから抜粋して挙げておく。「丁寧形+か」の部分に下線を付した。

- (3) あー T さんの、〈うん〉いえーは、〈ええ〉どこー、住んでいますか
- (4) きのうのいちにちに、〈うん、ええ〉なにがしましたか
- (5) はい、あの一、さっき、電車を乗ったとき、〈はい〉あの一、忘れ物一、
がありましたけど、〈はい〉あの一、ちょっと、探して、いただけませんか
- (6) あの一、だいたい日本人はあの一、パチンコは一、あの一知っていませんか

学習者は、上記のような文を安定して発することができるようになることで中級になっていくということである。

先程、初級・上級・超級学習者はコピュラ文が優勢で、中級学習者は動詞文が優勢であると述べた。しかし、中級でいったん動詞文が優勢になるのに、上級から再び初級と同じコピュラ文が優勢になるというのは、一見すると後退しているようにも感じられる。そこで、コピュラ文の使用の内実を吟味してみた。

すると、下位レベルの学習者の発話と上位レベルの学習者の発話では、コンピュータ文の使用パターンに相違が見られた。下位レベルの学習者（特に初級）の発話に関して述べると、ほぼテスターに対して何かを問い掛けるというパターンでのみの使用であった。つまり、コンピュータ文を使用するのはターンを譲るときである。それに対して上級・超級学習者は、相手への問い掛けの形式のみでなく、「なんと言えばいいんですかね」のような、自分が話し始める前の発話や、「〇〇さんが、『～でしたか』と言っていました」のような、直接話法としての使用などもできていた。つまり、下位レベルと上位レベルでは、「コンピュータ文+か」の使用パターンが根本的に異なっているということである。

次に、普通形述語に接続する「か」の特徴を明らかにすべく、レベルごとの出現回数を見ていく。結果を以下の表4に示す。

表4. 普通形に接続する「か」

	初級	中級	上級	超級	合計
コンピュータ文 例：明日か	1	87	161	179	428
動詞文 例：行くか	1	31	227	127	386
形容詞文 例：美しいか	0	7	34	9	50
副詞+か	0	1	12	16	29
合計	2	126	434	331	893

表4から、初級での出現はほとんど見られないことが分かる。初級では全てのパターンの合計回数がわずか2回であるのに対し、中級になると飛躍的に回数が増え、合計回数が126回となっている。その後の上級でも超級でも、普通形の合計回数は、初級と比べると非常に大きな数値となっている。

「普通形+か」の特徴を山内（2009）のアンモナイト形態素の考え方につなげると、「普通形+か」の使用が見られる学習者は、中級以上である可能性が高いと言うことができる。つまり、OPIで「普通形+か」という発話が観察されたら、その学習者を中級以上であると判断してほぼ間違いのないことである。

また、表4を見ると全体的にコンピュータ文と動詞文に使用が偏っていることが窺える。そこで、次は普通形のコンピュータ文と動詞文についての分析を行っていく。まずはコンピュータ文の分析から行う。コンピュータ文の分析結果を以下の表5に

示す。

表 5. 普通形のコピュラ文+「か」

	初級	中級	上級	超級
非過去・肯定形+か 例：明日か	1	84	71	137
非過去・否定形+か 例：明日では（じゃ）ないか	0	3	88	42
過去・肯定形+か 例：明日だったか	0	0	2	0
過去・否定形+か 例：明日では（じゃ）なかったか	0	0	0	0
合計	1	87	161	179

表5から、「非過去・肯定形+か」と「非過去・否定形+か」に使用が集中していることが分かる。「非過去・肯定形+か」は、初級では出現回数が1回だが、中級から飛躍的に回数が増え、84回となっている。また、「非過去・否定形+か」は、中級までは出現回数が3回だが、上級から飛躍的に出現数が増え、88回となっている。

このことから、普通形コピュラ文の「非過去・肯定形+か」の使用が見られる学習者は中級以上である可能性が高く、「非過去・否定形+か」の使用が見られる学習者は上級以上である可能性が高いということが言える。

以下に、「非過去・肯定形+か」「非過去・否定形+か」の実際の使用例を、それぞれ一文ずつKYコーパスから抜粋して挙げておく。「非過去・肯定形+か」「非過去・否定形+か」の部分に下線を付した。

- (7) (きのうはなにををしました、きのう) あきのうか、〈ええ〉きのう (中級)
 (8) あの一しかしまあその休養、といひます 〈はい〉かね、あのそれも一大事ではないかと、〈んーんー〉思いますよね (上級)

また、「過去・否定形+か」に関しては、いずれのレベルにおいても出現が確認されなかった。その理由は、例えば、「彼は学生だった」という文があった場合、このようなコピュラ文の過去形は、「今は学生ではない」という変化を推論させる。しかし、そもそも形容動詞・名詞には動作・変化が少ない。よって、過去の状態を話題にすることは少ないためであると考えられる。

次に普通形の動詞文の分析を行う。動詞文の分析結果を、以下の表 6 に示す。

表 6. 普通形の動詞文+「か」

	初級	中級	上級	超級
非過去・肯定形+か 例：行くか	1	28	213	120
非過去・否定形+か 例：行かないか	0	0	7	1
過去・肯定形+か 例：行ったか	0	3	7	6
過去・否定形+か 例：行かなかったか	0	0	0	0
合計	1	31	227	127

表 6 から、「非過去・肯定形+か」に使用が集中していることが分かる。特に、中級では出現回数が 28 回であるのに対し、上級から飛躍的に出現数が増え、213 回となっている。そのため、「非過去・肯定形+か」、つまり「終止形+か」の使用が見られる学習者は、上級以上である可能性が高いと言える。

以下に、「終止形+か」の実際の使用例を、KY コーパスから抜粋して挙げておく。「終止形+か」の部分に下線を付した。

- (9) あの、その、世界の、ん情報とか、自分が、いって、どのように、応用して、適応するか、というあの真剣に、〈うん〉あの考える、考えて、(上級)
- (10) いかにかくせいを、〈うん〉引率していくかが、あのーあとあとになって問題になってくるんじゃないかなっというのは、〈うん〉ね、〈うん〉でも一年ーを取った学生やったら、〈うん〉言葉でしゃべって、〈うん〉分かると思うんで、(超級)

(9) では、「どのように応用して適応するか、という」のように、(10) では、「いかに学生を引率していくかが」のように、「か」が埋め込み疑問文の一部として使用されている。このような埋め込み疑問文の使用が、上級から増えている。そこで、KY コーパスから普通形の埋め込み疑問文の出現回数も数えてみた。結果を以下の表 7 に示す。

表7. 埋め込み疑問文の出現回数

初級	中級	上級	超級
0	16	99	105

表7を見ると、初級での出現はゼロで、中級は16回、上級、超級はそれぞれ99回、105回となっている。埋め込み疑問文は中級で出現し始め、上級から飛躍的に数が増えているということである。また、埋め込み疑問文の出現回数をもう少し詳しく見てみると、中級での16回の出現のうち、「中級-下」における出現はゼロで、「中級-中」と「中級-上」のみで16回出現していることが分かった。

このように埋め込み疑問文の使用が上位レベルから増えることも、普通形の使用が上位レベルの学習者に多く見られることの一因となっているのではないかと考えられる。

ここまでは終助詞「か」の分析を行ってきた。次章では、その他の「か」の分析を行う。

6. その他の「か」の使用に関する分析

学習者の発話に出現した「か」を、大きく終助詞「か」とその他の「か」に分類し、そのうち、5. では、終助詞「か」に関して学習者の発話の分析を行った。本章では同様に、その他の「か」の分析を行っていく。

その他の「か」の出現を全て数え、レベルごとにまとめた結果を以下の表8に示す。

表8. その他の「か」のそれぞれの総数

	初級	中級	上級	超級	合計
とか 例：明日とか	7	212	558	334	1111
だとか 例：旅行だとか	0	0	6	7	13
なんか 例：なんかおかしい	0	68	342	173	583
名詞+なんか 例：これなんかどうですか	0	0	22	8	30

～か～ないか、～か～でないか 例：行くか行かないか	0	0	3	4	7
～か～、～か～か 例：りんごかみかんか	0	7	13	16	36
どうか（副詞） 例：どうかお願いします	0	0	1	0	1
なんとかかんとか 例：なんとかかんとかというお店	0	0	0	1	1
なんとか① 例：なんとか乗り越えた	0	0	13	8	21
なんとか② 例：とかなんとか言っていた	0	2	10	2	14
合計	7	289	968	553	1817

表8の「とか」「なんか」に焦点を当ててみると、両者ともレベル間の出現回数に大きな差があることが分かる。

まず「とか」に関しては、初級での出現回数が7回であるのに対し、中級では出現回数が飛躍的に増え、212回となっている。また、「なんか」に関しては、初級での出現が0回であったのに対し、中級では68回となっている。さらに、細かく見てみると、68回のうちの65回が「中級－上」での使用であることが分かった。「中級－下」「中級－上」での合計出現回数がわずか3回であったのに対し、「中級－上」では65回も出現しているということである。つまり、「なんか」の使用が見られるのは、中級と言っても、特に「中級－上」からなのである。

ちなみに、「中級－上」というのは、上級の機能をほぼ遂行できるが、そのパフォーマンスを維持することができないというレベルである。したがって、「なんか」の使用は、事実上、上級からであると言ってよいのかもしれない。

以下に、「とか」「なんか」の実際の使用例を、それぞれ一文ずつKYコーパスから抜粋して挙げておく。「とか」「なんか」の部分に下線を付した。

- (11)とうがらし入れて、あの一とうふ、〈ええ〉入れて、切ったら、うん、切ったらいいです、〈うん〉入れて、あの醤油とか、あじのものとか、〈うん〉あの、佐藤、〈ええ〉と、うん、入れて、ちょっと炒めて、(中級)
- (12)いや、なんか、車、トラックの方が、〈ええ〉なんかバランスを崩れて、〈ええ〉たぶん、転んだと思います、けど(中級の上)

以上、その他の「か」の分析結果をまとめた。

7. まとめ

最後に、本稿で明らかになったことをまとめる。本稿では、終助詞「か」とその他の「か」それぞれに、あるレベル以上の学習者にのみ使用が見られるパターンをいくつか発見することができた。

まず終助詞「か」から確認していく。終助詞「か」では、「普通形+か」の使用が見られる学習者は中級以上である可能性が高いということが分かった。さらに普通形を細かく見ていくと、コピュラ文の「非過去・肯定形+か」の使用が見られる学習者は中級以上である可能性が高く、同じくコピュラ文の「非過去・否定形+か」の使用が見られる学習者は上級以上である可能性が高く、動詞文の「終止形+か」の使用が見られる学習者は上級以上である可能性が高い、という結果であった。

次にその他の「か」については、「とか」の使用が見られる学習者は中級以上である可能性が高く、「なんか」の使用が見られる学習者は中級の上以上である可能性が高い、という結果であった。

これらの結果を踏まえて考察を述べる。「普通形+か」に関しては、中級から使用が見られたが、上級・超級ではさらにその倍以上もの使用が確認された。これはやはり、上級から埋め込み疑問文の使用が飛躍的に増えたことが関係していると考えられる。上級からは、終助詞「か」を疑問文以外の形式でも多く使用できるようになるということである。

コピュラ文の「非過去・肯定形+か」というのは、名詞や形容動詞にそのまま「か」が付加された形式である。つまり、コピュラの「だ」「です」を「か」に置き換えれば発話できるということである。活用が関係しないため、発話するのはさほど難しくはない。そのため、中級から使用が増えるのだと考えられる。それに対し、コピュラ文の「非過去・否定形+か」、動詞文の「終止形+か」を発話する際には、「か」に接続する語の活用を考える必要が出てくる。そのため、やや難易度が上がり、中級ではなく、主に上級で発話されるという結果になっているのではないだろうか。

「とか」が初級で使用されない理由は、「とか」を初級で積極的に教えることが少ないということではないかと考えられる。普通、初級では、同じ並立助詞の「や」「と」は教えても、「とか」を積極的に教えることは少ない。そのため「とか」の初級での使用が少なくなっているのではないだろうか。

「なんか」は、それを発話しなくても、文意に大きな影響を与えることのない語である。また、そのためか、フィラーとしても使用されている。発話しなくても文意に大きな影響を与えることのない語というのは、学習者にとっての使用動機がそれほど高くない語であるとも言える。そのため、「なんか」の使用が中級以下の学習者にはあまり見られなくなっているのではないだろうか。

文法的形態素の「か」及び文法的形態素の一部となっている「か」というのは、学習者のレベルの判断基準の一つになるものではないかと思われる。本稿においては、埋め込み疑問文に関する指摘を若干行いはしたものの、複文生成という視点で「か」をとらえることがほとんどできていなかった。今後の課題としたい。

注

- 1 本研究では、書き言葉ではなく話し言葉をデータとして扱っているため、「文」の認定が非常に難しい。本稿では、話し言葉における「文」の定義にまでは踏み込まず、文法的に区切れており、かつ、意味にまとまりが感じられるものを、とりあえず「文」として考えることにした。

参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 西川寛之（2009）『日本語文末詞の研究 一文構成要素としての機能を中心に』凡人社
- 山内博之（2009）『プロフィシェンシーから見た日本語教育文法』ひつじ書房

謝辞

本稿は、2012年6月16日にお茶の水女子大学で行われた「第2言語習得研究会（関東）」での発表内容をまとめたものである。会場では、多くの方から貴重なご意見をいただくことができた。ここに記して感謝の意を表したい。

（うるしだ あや・実践女子大学大学院博士前期課程）